

泉郷獅子舞



千歳市泉郷獅子舞保存会
千歳市教育委員会
千歳文化財保護協会

目次

序にかえて	登坂 英治	3
あいさつ	宮澤 一成 岩本 正生	4
一、泉郷の祭り	清水 修 赤間 重昭	7
二、調査概要		9
三、源流を訪ねて		11
獅子舞のルーツ／富山県の獅子舞／原型は南砺波地 方に		
四、伝承経路と伝承者		16
山城説／ケヌフチ原野／鶴次郎と周辺の人々／舞鶴 の獅子舞		
五、変遷		22
明治末から戦前にかけて／戦後の獅子舞		
六、獅子頭		24
七、古老の話		26
高橋佐一郎さんの話／故・白井政治さんの話／信田 信太郎さんの話／山城セツさんの話／山城キミヨさ んの話／永森ヤスさんの話／角谷従政さんの話		
踊りの図解と採譜		32
あとがき		38



八五三の舞



天狗の舞



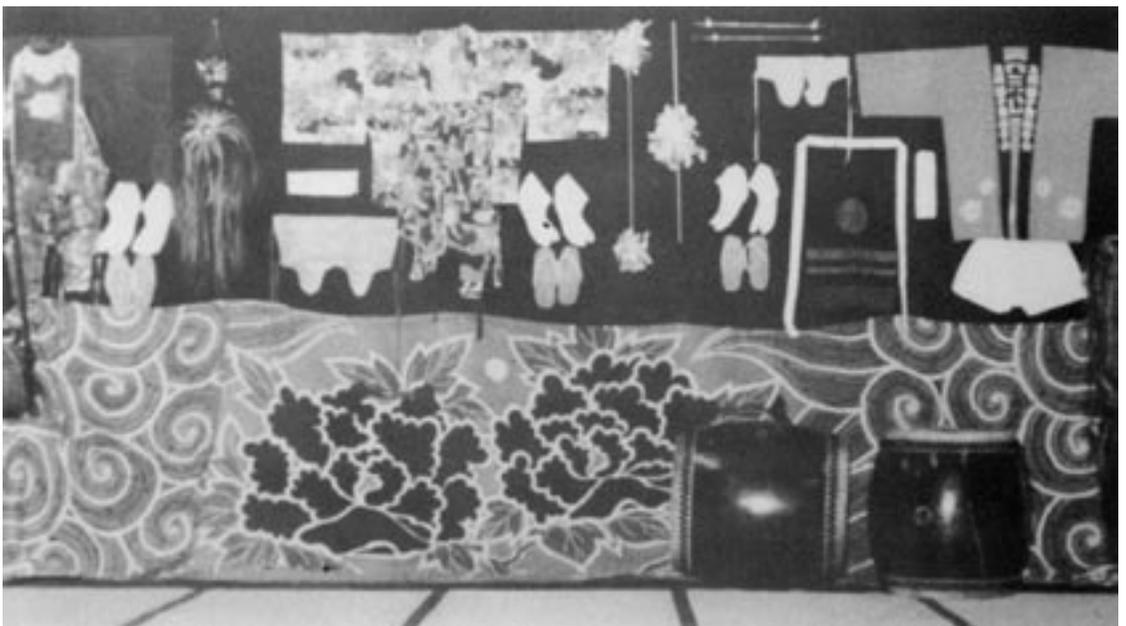
初代



2代目



3代目（現在）



衣装と道具

序にかえて



泉郷獅子舞——わが郷土泉郷（旧ケヌフチ）に住んだことのある人ならば、だれ一人知らぬ者がいないほど、村の行事に人びとの生活に親しみ密着し、古く明治の時代より受け継がれて来た郷土芸能であります。

泉郷の開拓は明治二十年代に入ってから始まり、三十年代には本格的な農業、林業を中心とした開拓がなされて来たようでありました。この開拓の大半は（富山県）を初めとする北陸出身の人びとによってなされました。こうした開拓当時、未知の土地に対する人びとの不安、郷愁、また何ひとつ娯楽のない時代の村祭りに、この富山県出身者らの手によって、明治三十年代に始められたのが獅子舞でありました。以降、これまでの八十年間にわたり五穀豊穡、無事息災、家内安

全を祈願し、時の若衆、青年団を中心とする村づくり、人びとの和をつくる中心的存在としてその使命を果たして来ました。泉郷獅子舞の「七五三」「八五三」の舞、リズムカルな太鼓、笛の音を知らぬ者はだれ一人いないほどありますが、しかし、それがいつ、どの地方から、だれによって伝えられたのかなどはまったく記録に残っていないのであります。それは、獅子が年中行事として生活の必需品となっており、あえてルーツなどを知る必要がなかったからかもしれません。時代が変わり、この獅子舞が未永く受け継がれて行くうえでも、諸先輩が健在なうちにその全容を把握しようとしたのが、昭和五十二年からの泉郷獅子舞ルーツ捜しであります。これまでの間、私たちは地元を初め、長沼町、室蘭市、札幌市など道内と、富山県など道外の獅子舞と関係した多くの方がたの協力を仰ぎました。この報告書は、その中で泉郷獅子舞の原型と伝承経路、時代、変遷などを把握して一応のまとめといたものであります。しかし、伝承者、伝承経路など二代、三代とさかのぼることを数少ない記録と薄れた記憶の照らし合わせでまとめた部分もあり、不備な点もあろうかと思えます。これらについては関係諸氏の一層の調査に期待するものであります。

わが郷土の誇りとする歴史ある獅子も、先輩諸氏と関係各位の温かい愛情のもと、獅子頭ほか立派な衣装一式を新調させていただき、以前にも増して艶やかに、勇壮に、秋祭りには奉納しております。同時に郷土芸能への愛情と八十年という伝統、関係当局のご理解を得、昨年十月をもって千歳市民俗芸能無形文化財第一号に指定されるに至りました。

ここに至ってもはや泉郷獅子舞は富山県の獅子舞ではなく、樽前山の火山灰の不毛の地に緑豊かな作物を育てあげ、住みよい豊かな農村地域社会を築いたこの土地の獅子舞であります。今後もわが郷土の伝統と心の糧として、芸能として、芸の練磨と継承に力を注いで行きたいと考えます。

直、執筆につきました。苦小牧民報社報道部新沼友啓記者の御協力を得たものであります。深く感謝すると共に皆様のご理解とご支援を心よりお願い申し上げます。

昭和五十六年三月

泉郷獅子舞保存会

会長 登坂英治

あいさつ



千歳市教育委員会

教育長 宮 沢 一 成

美しい自然と環境に恵まれた千歳市は、明治13年戸長役場が設けられて以来、一世紀をすぎ、道央の近代都市として発展を続けているわけですが、この基は、先人のたくましい努力と英知によって培われてきたものであります。

当市の無形民俗文化財として指定されております「泉郷獅子舞」の由来も、明治の中頃北海道の開拓者として富山県から入植してきた人々が遠く郷土を想い舞われたものであり、現在まで連綿として子孫に引き継がれ、郷土芸能として独自の道を歩んでいることは、大変感慨深いものがあります。

今回泉郷獅子舞保存会の皆様方が長年の間調査を進めておりましたこの獅子舞のルーツについて、報告するはこびになったことは、今後これの保存のため大変喜ばしいことと存じます。

文化財は国民の財産といわれておりますが、年々破壊され、またすたれていく傾向にあり、特に無形民俗文化財に関しては、その後継者の養成等に大変苦慮しているのが現実であります。当教育委員会は、関係各位のご協力をいただき、永く保存をし、後の時代に引き継がれていくよう努力を惜まない所存であります。



保存会初代会長 岩 本 正 生

泉郷獅子舞の思い出をいささか記して見たいと思います。私、昭和二年に学校を卒業しまして、嶮淵青年分団に入団致しました。当時から泉郷の獅子舞が、盛大に祭典行事として行なわれ、基の主催者は青年分団でした。私もその由来等も知るすべもなく、当時何の娯楽も無い農村では、最大の自分の楽しみ、又部落民もたのしい最大の行事として受け継いで参りました。然し、昭和十六年より世界第二次大戦に突入し、若い人達は皆、召集されました。自然消滅の形と成りました。終戦後も戦後の混乱に再生出来ませんでした。二十三年頃と思いますが、部落総会にて祖先伝来の泉郷獅子舞を保存すべきとの事で私が初代保存会長として再出発することに成りました。其の後頭又は幕の取り変え等も致しましたが、安物

の為長持ちは致しませんでした。其の間、NHKの生放送に出演したり、全国レクリエーション大会等に招かれました事等は大きな思い出であります。

其の後、新会長登坂氏が受け継がれまして部落保存会員の御協力によりまして高価なる必要の品々を整えられ、又由来の地へ再三出向かれ調査なされまして郷土芸能の意義を正されました事は、尊敬に値するものであります。そして部落民多年の念願でありました千歳市無形文化財の指定を受けるに至りました事は誠に敬賀に至りと存じます。今後益々保存会の意義を深からしめられるよう努力の程をお願い申し上げます。末筆ながら以上思い出の一部を記させて載き終らせて載きます。



第一次調査団団長 清水 修

稲穂が黄金の小波を打ち始め、空はあく迄も碧く澄み渡り、赤トンボの大衆団は夕日を追って、西に向って行進する。

九月二十日、朝早くから笛、太鼓の囃が村中に流れる。子供達は、獅子舞の自分の家に廻って来るのを待ち切れずに走り出し、獅子連中の後を追い、追し付いたころには早くも、五人、六人と、……。白粉、口紅、眉墨で厚く化粧、明彩鮮かな衣装、鈴を無数につけ金銀で彩取られた前掛姿に、自分の兄ちゃんの見分もつき兼ねるまゝ、後になり前になりして歩いて歩く。村の家々の庭先には、この連中を待ち受けて、餅、菓子、酒、西瓜、味瓜等が並べられてあり、舞い終ったところでこれを御馳走になり次へ廻って行く。童達もこの御相伴にあずかるのだ。こんな事が、私の子供の頃にある断片的乍ら強い印象に残っている祭りであり獅子舞である。青年になつて獅子連中の一人として、此の伝承を受けつぎ次の世代へ送つて来た。此の近辺では、泉郷にだけ獅子舞がある。私には今もつて自慢の一つである。発祥の起源、由来も知る由もない。只集団の中で技術だけが引き継がれて来たのである。たまたま千歳市として、歴史的文化財に指定し、保存、伝承に加わるという話が出ました。これを受ける為にも泉郷開拓の歴史の中に於ける獅子舞の位置付けを明確にしなければならぬ。早い機会に（現在）知る限りその根源を調査する必要性に迫られて来た。

有志を以つて富山方面ヘルツを求めて旅立つたのである。いろ／＼な方にお会いし、お話しを聞き、実演を見せて載き、持参した泉郷のビデオをお見せするなどして意見の交換をしながら、日本に於ける獅子の伝承、定着そして伝播、その中に於ける泉郷への渡来、伝承過程等々、随分有意義な月日であった。詳しくは本文に記載されますが、一直線に獅子の現在を語るならば、南方の国々（東南アジア）から中国を経て、或いは直接日本へ、そして宮中の舞楽として伝わり、徳川天下平定に依る平和時代になり、築城大工の失業、それらの手工技術は、獅子面作りに及び、水見に移封された前田候のお抱え大工の集団地区を中心に急速に発達した。亦彼等の大工技術は優れたものであり、家屋建築大工として越中越前五箇の山間地迄も分散、一年がかりで一戸完成するのが普通であった。その期間中は村の諸行事に融合、その中で獅子舞が伝播されたものとおも

われる。その後、日清、日露の両戦後のため一時的応召不在、帰還の喜び、戦勝の祝と重なって聚落毎の獅子舞はレパートリーの広さとその深さに於て研を競い、急速な発達を遂げたものであり、富山地方に於ける現在の形態を作り上げてしまったものである。泉郷の舞はどうであったのか、前述の急速な発達変化を来す以前のものであり、北辺開拓の寒村にあつては、競い合う相手のないまゝ、伝承当時そのまゝで経過したものであり、今回富山に再現したところ最も古く基本的なものであり、素直に伝承されたその舞は（富山県文化財保護審議委員獅子舞専門家としても）稀少価値を高く評価されたのであります。

泉郷獅子舞も、今後どの様に變化したレパートリーを拡大されて行つても良い訳ですが、この基本の舞は舞として、是非守つて行つてほしいものである。いずれにしても開拓苦難の時代に於ける泉郷獅子舞は、祭と共に村中の最大行事として、喜びも悲しみも共に托して来た心の依り処であつた事に間違ひはない。これ等諸々の世情を見つめて来た獅子舞は、今後も泉郷發展のシンボルとして、永遠に伝承される事を固く信じている一人である。



千歳文化財保護協会会長

赤 間 重 昭

北海道は明治以来新天地を求め人々が各地から入植しひとつの共同体を築きあげてきました。このきびしい環境の中人々は出身地が異なり、国のなまりが違つても助け合い逞しく現在の豊かな北海道を築いてきました。このような地域共同体をひとつに結びつけること、これは決してなまやさしいものではなかつたであります。このような中、千歳市泉郷には明治来獅子舞という道内でもまれな郷土芸能を守り継いできました。たとえ戦事中の混乱において一時の中断があつたにせよ、九十年にもおよぶ長きにわたり、この行事が連綿と受け継がれてきたことはそこに住む方々の土地に対する愛情の強さを示すものと存じます。今でこそ泉郷は豊かな耕地を擁していますが開拓当時飲料水にもことかく原野でありその辛苦は大変であつたろうと思います。

私共千歳文化財保護協会は当市内に遺る埋蔵文化財を始めとする貴重な文化財を保存し継承し、さらにその文化財を活かした環境づくりを目的としておりますが、登坂会長をはじめとする泉郷獅子舞保存会の方々は、当協会を支える力強い同志であります。

この度保存会の方々の努力で、泉郷獅子舞の由来が探られ、このような立派な出版をみるに至つたのは、現在の若い会員の努力もさることながら、それを支えた泉郷のすべての住民の獅子舞に対する愛情のあらわれと考えます。文化財は、決して展示室に飾り保存するものとは限りません。かえつてそれを生活の中に活かしたもののこそ、真の文化財といえるのではなからうかと思ひ、泉郷獅子舞の隆盛にさらに敬服し、今後のますますの發展をお祈りする次第であります。

一、泉郷の祭り

千歳市泉郷は千歳市街地から国道三三七号線を北東へ車で十五分ほど走った地域に広がる農村地帯である。夏から秋にかけて黄金色の小麦の穂が広々とした畑に波打つ。大きさが赤ん坊の頭ほどもあつて、かじると甘い汁のほとぼしるビートが黒々とした地中からカブのように緑の葉を繁らせる。牧場から聞こえる牛の鳴き声は、静かな農村風景に落ち着きを加える。

九月二十、二十一日はこの地域の鎮守社泉郷神社の秋祭りである。農作業に追われる人々もこの日ばかりはその手を休め、祭りを楽しむ。そして「まだ来んか」「ほら太鼓が聞こえて来たぞ」「いよいよウチの番だ」「今年の頭（かしら）持ちはだれかな——そんな会話を交わしながら家々で心待ちにしているのが、昭和五十四年十月に千歳市の民俗芸能無形文化財第一号に指定された泉郷獅子舞である。

二十日の早朝、泉郷の若者たちは地域の中心部にある公民館に意気揚々として集まる。舞に使う獅子は、胴の長さが約五メートル、幅が二メートルほどもある。頭持ちを含めて

胴幕（カヤ）の中に入る若者たちは九人。獅子頭を持つ者（頭持ち）の後に一人、その後に六人が縦二列に並んで胴幕を支える半月形の竹の輪を持ち、その後尾一人が続く大きな獅子である。この胴幕の中の若者たちは白い短パン、水色の背中に◎と赤く染めた半てん、はち巻き姿。タビにワラジ、手甲、ひざ下までの黒い前掛けをつけ、口紅と鼻筋には白粉をつける。胴幕の外には太鼓二人と笛三人、計五人のはやし方がおり、これも胴幕の中の若者と同じ装束をしている。しかし「獅子とり」あるいは「花持ち」と呼ばれて獅子の前で踊る踊り子は、赤い派手な着物に緑のモンペ、黄色のタスキを背中よりボンに結んで垂らし、ほお紅までつけて念入りに化粧をする。

装束を整えた若者たちはトラックに用具一式を積み込み、やや離れた小高い山の上にある泉郷神社へと向かう。この神社は明治時代には周辺の湿地や沼にツルがたくさんいたことから「鶴居沼神社」と呼ばれていたようで、その後、明治神社、嶮淵（ケヌフチ）神社と名を変え、戦後、現在の泉郷神社の名前とな

った。祭りなどには千歳神社から神主が出向き、一切の神事を行っている。この神社の山に登ると南東には嶮淵川とその上流にまで流れに沿って両岸に広がる平地、西側には石狩平野に続く広々とした耕地がよく見える。急な坂道を登って参拝を済ませると若者たちは持参した御神酒をグイッとあおり、古くから踊り継がれて来た「七五三」「八五三」の舞と、昭和五十三年に創作した「天狗の舞」の奉納である。

鎮守の森に太鼓がとどろき、笛が響く。



門付の獅子舞を見る子供たち



昭和 54 年からは子供たちも「獅子とり」に参加

「七五三」は勇ましく軽快な調子である。獅子の前で一人の獅子とり（踊り子）が獅子頭と向かい合い、半紙に紅を散らした花を真ん中につけた五十センチほどの棒を振りながら左右に跳びはね、獅子を招く。獅子は赤色の頭から金色に輝く目で獲物をにらみ据え、金色の口をガツと開けて威嚇する。獲物の動きを追って獅子も左右へと跳び、緑色の巨大な胴の左右に一輪ずつ染め抜かれた大きな紅牡丹

がゆれる。獅子とりは棒を突き出し前後に跳びはね、獅子がその動きに合わせて跳びかかろうとする。これを「食いつき」と呼んでいる。この後、獅子とりは獅子に背を向けて逃げ、獅子をなだめるように再び左右に、前後にと棒を振りながら跳びはね、獅子もその動作の後を追って跳ぶ。やがて獅子は沈められ地面にうずくまる。太鼓と笛が細かく長く余韻を残し、一分十秒ほどの短かいドラマが終わる。悪霊は退散したのである。

「八五三」も「七五三」とほぼ同様のストーリーである。ただ「七五三」で横に跳ぶ時、最初の一步目を右に跳ぶのに対し「八五三」では左に跳ぶ。また「七五三」では獅子と獅子とりが向かい合っているの比べ、「八五三」では獅子も獅子とりも横向きに並ぶように位置する。ちょうど「七五三」踊りを横で見ている者に顔を向けて踊るようなかっ好になる。はやしは「食いつき」の部分で太鼓も笛も一拍多だけで、あとは同じ調子である。

「天狗の舞」は「七五三」と、「八五三」を混合し、ややはでにしたもので踊りの時間は二分間程度。獅子とりは一人で天狗の面と装束をつけ、わらじをはく。手には一・八メートルほどのヤリを持つ。やはり前後左右に跳びはね頭上でヤリを回しながら踊り、最後には獅子を刺し殺す。「七五三」「八五三」がおどけた調子を交えて獅子を沈めるのとは

ちがいが、戦闘的である。

舞の奉納を終えた青年たちは再びトラックに乗り込み、荷台で道中大鼓を打ち鳴らしながら地域の六十数戸一軒一軒を回る。三つの踊りのうちのひとつを舞って五穀豊穡、災厄退散を祈願する。

人々は玄関先、庭先に出て獅子を迎える。

子供たちは恐ろしがって親の陰に身を隠し、年寄りがかつて自分も踊った昔を思う。「今年の獅子は動きがいい」「いや足がそろわぬ」と目を細め、若者たちに御神酒を振るまい「花」（祝儀）を渡す。トラックの荷台で昼食をとる強行軍。最後の一軒が終わる頃にはもう日が暮れている。家々で振るまわれた御神酒でメンバーのあるものはすっかり酔いつぶれてしまうが、その夜は遅くまで酒宴。翌日は本祭りである。

二、調査概要

昭和五十四年十月に千歳市民俗芸能無形文化財となった泉郷獅子舞は、明治から舞い続けられて来たものとされていた。戦後は昭和三十六年に泉郷住民による保存会が発足。4 Hクラブの青年たちを中心に舞われて来たが農村青年の都市への流出による後継者不足で、その活動は細々としたものだった。しかし、昭和五十年代に入って郷土芸能としての見直しが図られ、青年層を中心に活動が活発化。泉郷神社への奉納と地域各戸への門付けを行う一方、昭和五十二年からはこの獅子舞の起源、伝承経路などを探る調査を進めた。地元泉郷を初め札幌、室蘭、小樽、長沼などでの道内調査とともに、五十二年夏から五十五年冬にかけての三年半の間に四度にわたって富山県、岐阜県での道外調査を行った。

道外第一次調査は五十二年八月。清水修（団長）、登坂英治、開発三郎、信田広美、遠藤満、堂高政勝の六人が参加し、富山県富山市、同県南西部の砺波（となみ）地方などを行った。この調査を前にして泉郷獅子舞についてわかっていたことと言えば①明治から踊り継がれており富山県からの開拓民が持ち込んだ②「山城」という人が中心となって教えていた③「山城」の親せきの高橋という富山の売薬行商人がかつて泉郷地区を歩き、獅子舞についてもよく知っていた——という程度だった。いつ、だれが、どこから伝えたのかは泉郷の古老たちの話によっても正確なことは分からず「泉郷の獅子舞をVTRに撮ってそれを現地（富山県）の専門家に見せたらどんな種類のものかわかるだろう」「泉郷に伝えたのは多分、高橋という人ではあるまいか——そんな軽い気持ちで臨んだ。

この見通しは多分に甘かったが、幸運が調査団を助けた。それは小樽から出発したフェリーの中で偶然に獅子舞の愛好家である富山県内の売薬業者と同席となり、他の愛好家を紹介してもらってそれらの人の話から同県内の獅子舞の予備知識を得たこと。県教委がこの年の二年半ほど前から県内の獅子舞について緊急調査を始めており、ある程度の集約がされていたこと。さらに大正から昭和にかけて泉郷（同時はケヌフチ）を歩いていた売薬行商人の高橋佐一郎さんが七十八歳の高齢にもかかわらず矍鑠（かくしやく）とし、ケヌ

フチとそこに住んでいた人々について鮮明に記憶していたことなどだ。第一次調査では、泉郷獅子舞とはば同型の獅子舞が砺波地方南部と北飛驒の山間の五箇山地方に分布しており、また、現在の富山市水橋小出身の「山城鶴次郎」がケヌフチに獅子舞を伝えたらしいということがわかった。これらは大きな収穫だったが、泉郷への伝承者と思われる山城鶴次郎の出身地と砺波地方は県の東西に離れており疑問が残った。

第二次調査は五十三年三月に行われた。メ



現地調査する保存会員

ンバーは登坂英治、遠藤満。これは事実上獅子頭の注文のための旅行だった。当時舞に使われていた獅子頭は二代目で、明治以来戦後まで使われ続けていた初代の獅子頭は千歳神社に奉納されており、これは小づくりな二代目の頭と比べて勇壮で重量感がある。伝統を重んじた保存会では、これと同様のものを三代目として再現しようとし、富山県内の獅子頭のほとんどがつくられている井波町を訪れた。初代の獅子頭はカツラの木でできており漆塗りをしない白木のままで、泉郷で作られた可能性が強いため、その調査も兼ねた。井波町ではカツラで獅子頭を作ることではなく、泉郷で作られたとの推測は強まった。

第三次調査は岐阜県内に泉郷獅子舞と同様のものがあるとの情報を得ての調査だったが徒労に終わった感が強い。五十四年一月末から二月にかけて登坂、遠藤の二人が岐阜県白川町、高山町などを訪れた。

第四次調査は、富山県の高橋佐一郎さんの話から山城鶴次郎の家系をたどり、道内関係者からの聞き取りを行ってからのいわばダメ押しの調査だった。泉郷獅子舞と同型ものが分布する砺波地方南部と、そこからはるか離れた地方の出身である山城鶴次郎がどう結びつくのかが大きな問題点で、実施は五十五年二月。登坂、遠藤、土居に地元紙記者が同行。

以上四度の道外調査とそれからむ地元泉郷、道内での聞き取り調査の中での関係者の話は、六十分間の録音テープ約五十本分となった。これらによって泉郷獅子舞の発祥地や伝承ルート、伝承された年代、伝承者などについての多くの部分が掘り起こされた。

調査によると、この泉郷獅子舞の原型は富山県西部の石川県と接する砺波地方南部の城端（じょうはな）町、福光町、また北飛騨山中の五箇山に分布する。同県の氷見（ひみ）獅子と石川県の加賀獅子との混合型であり伝承は城端、福光町周辺から山城鶴次郎の出身地付近である富山市水橋で中継され、明治二十九年頃、千歳市泉郷——当時の千歳村ケヌフチに鶴次郎が持ち込んだとする見方がある。しかし、ほかに泉郷に隣接する長沼町舞鶴にも同型の獅子舞が明治四十年代にあつたとする証言もあり、伝承経路については若干の疑問を残す。舞が盛んになったのは明治三十年代後半から四十年代にかけてと思われる。現在三代目を数える獅子頭のうち初代は明治四十年前後に泉郷で作られた可能性が強い。これら一応の結論は、原型の分布を除いてほとんどが関係者からの聞き取り調査によるものだ。記録文書はというと、例えば中継地と思われる富山県水橋町（現富山市水橋）の町史を調べても獅子舞については記されておらず、大正初年頃発足した泉郷の青年団の資

料も焼失してしまっているなどほとんど得られなかった。関係者が遠い記憶を呼び起こしての話は、そのまま確実とは思われない。道内と道外に残る古老たちの話を照合しても、なお疑問とされる点は多くあり、その決着は今後の調査を待つこととなった。

以下に調査の詳細を報告するが、その前にまず獅子と獅子舞そのものについて触れなければならぬと思う。

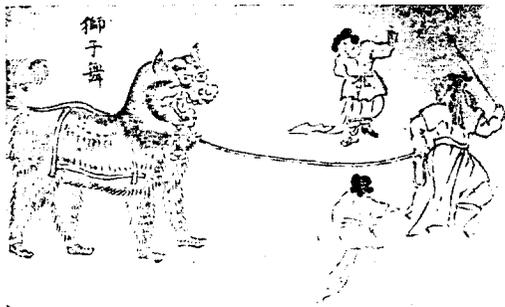
三、源流を訪ねて

❖ 獅子舞のルーツ

日本の獅子舞芸能には二つの流れがある。一つはシカやイノシシをモデルにした獅子で、関東や東北地方には一人ひとりがシカの頭（かしら）をかぶり、胸につるした太鼓を打ちながら三人から八人ぐらいで群舞するものが多い。もう一つはライオンをモデルとした外来の獅子——唐獅子で、獅子頭に幌をつけ、幌の中に二人入る（二人立ち）のが基本形。泉郷獅子舞はこの唐獅子であるが、大勢の人が幌の中に入ることから、この唐獅子の変型とも言えそうだ。

唐獅子は七世紀の初めごろ中国から伝来した。この獅子舞はもともと中国南部の呉の国の伎（ぎ）楽で、ライオンが霊獣として尊ばれた天竺（てんじく＝インド）や西域の影響を受けている。伎楽の獅子は単独で舞をしたわけではなく、仮面行列の一部である。行列の先頭にはまず天狗のように鼻が高く、赤い顔に口やアゴにひげを生やした「治道（ちどう）」と呼ばれるものが露払いの役をし、それに二人の獅子児（ししこ）にあやされなが

ら一頭の獅子が続く。その後には呉公（貴公子）、迦楼羅（かるら＝仏教の想像上の鳥）、崑崙（こんろん＝マレー人の漢名）、呉女、力士、婆羅門（ばらもん＝インドのカースト制度で般高位の僧侶）などの面をかぶった者が続き、練り歩いて数々の余興を演ずる。日本に伝わった伎楽は、当時国教として盛



獅子と獅子児（「信西古楽図」より）

んだった仏教に取り入れられて東大寺やその他の大寺に広まる。しかし、こっけいで卑わいなしぐさも多い俗楽であったためにやがて滅び、中国でも一切の悪霊を追い払う霊獣とされていた獅子だけがクローズアップされ、生き残る。そして宮廷や寺院ばかりでなく、民間の社でも獅子舞が演じられる。中世、近世になると東北では山伏たちの祈祷の神技として、また、西日本では伊勢、熱田神宮のお札配りの際に諸国で演じられ、日本各地に広まることになる。

伎楽はインドばかりでなく遠くギリシャの演劇の影響を受けているともいわれる。ギリシャ、インド、中央アジア、中国——と、国際感覚にあふれた獅子舞は日本の海辺の、そして山間の小さな村々にまで受け入れられる。古くから日本には海のかなたから渡って来る「訪来神」の信仰が数多くあり、この信仰の土壌が外来の霊獣である獅子を容易に受け入れる基盤となった。獅子は人々にとって遠く海を渡って悪霊を退散させるためにやって来た神であった。そして事実、歴史的時間をかけ、当時の庶民にとって思いも及ばぬ遠い国々の影響を受けながらやって来て、辺境の地にまで根づいた。そこに獅子をめぐるダイナミズムとロマンがある。

人々は歯固めと称して、悪霊を払うために獅子に体の一部を噛ませて健康を願い、家の

柱を嘯ませて家内安全を、書物を嘯ませて学問の向上を、また、農具や算盤を嘯ませて家業の繁栄を願う。

外来の神——獅子と獅子舞は、やがて土着の風習、民俗芸能として生活の一部となって行く。

❖ 富山県の獅子舞

富山県には数多くの民俗芸能がある。神楽、巫女（ふじよ）舞、稚児舞、雅楽。「槍踊り」「棒踊り」「刀踊り」、猪谷の「百万石行列」などの珍しい舞踊。あやつり人形芝居。「舞々」「祭文（さいもん）語り」「替女（ごぜ）」「猿まわし」「蚕（こがい）ほめ」などの門付芸。五箇山地方など各地に豊富な民謡、盆踊り唄——などと多彩を誇る。この豊かな民俗芸能に代表される「越中文化」は、地理的に日本の中央に位置するこの地方に、古くから東西日本の様々な文化が陸路や海路を経て流入し、混じり合い、形成されていった。

富山県には「村の数だけ獅子舞がある」とまでいわれるほど数多くの獅子舞があり、それは同県の貴重な民俗芸能のひとつとなっている。

県内には、八尾町布谷の紫野社に伝わる文明十三年（一四八一年）の記年のあるものなど室町時代から江戸時代初期に作られた古い獅子頭が各所に保存されており、獅子の歴史

の古さを知らされる。しかし、同県で獅子舞が芸能として行われるようになったのは江戸時代中期以降のこととされている。

県教委は昭和五十年から五十三年度までの四年間、県内獅子舞緊急調査を行い、獅子の形や踊り子の衣装、持ち物、舞の形態や名称、地域に伝わる獅子舞の沿革などをまとめている。この調査によると同県内で現在獅子舞が行われている地域は一千百五十四カ所。休止中のものを含めると約一千三百カ所に獅子舞があると推定されている。同じマチの中に地域ごとにくつもの獅子舞がある。例えば富山市には約百二十カ所に、一町で約六十カ所に獅子舞があるとところさえある。

獅子にはシカ、イノシシをモデルとしたものとライオンをモデルとした伎楽系の外来の獅子があるわけだが、同県の獅子は後者——ライオンをモデルとした獅子である。その獅子舞の種類は多岐にわたるが、胴幕の中に二人の踊り手が入る「二人立獅子」と、大勢の人が入る「百足（むかで）獅子」とに大きく分けられる。二人立獅子は伊勢太神楽の影響を強く受け、日本の各地に見られる「四本足の獅子」である。百足獅子は胴幕の中に四、五人から十数人もが入り、越中や加賀（富山県、石川県）に特異な獅子舞となっているが、本来四本足であるはずの獅子になぜ多くの人が入り「百足」になったかは定かでない。

県教委は二人立獅子と百足獅子を踊りの形態や踊り子の持ち物、衣装などから、さらに次のように分類している。

〔二人立獅子〕

金蔵獅子——雄雌二頭が組になって踊るが一頭のものもある。曲芸的、写実的な所作が多く、前足と後足の役の二人の踊り手が軽業的な芸を演ずることもある。獅子頭は小さく「猪獅子」とも呼ばれる。武者姿の踊り子・キンゾウ（金蔵）が獅子を討ち取る踊りがあるところから「金蔵獅子」の名



金蔵獅子 大沢野町小羽（「富山県の獅子舞」より）

前がついている。伊勢太神楽獅子が飛驒を越えて流入したものと思われ、北飛驒に多い。神通川に添って県の中央を山から海へ向かって横切るように分布している。

下新川獅子——二人立ちだが尾持ちが抜けて頭だけで演ずることがある。獅子頭は頭にかぶる。獅子あやし（踊り子）は天狗面をつけ、数が多く八人から十六人という村もある。一見、一人立ちに見える点や御幣でお祓いをする点など伊勢太神楽の形に近い。県東部の下新川郡一帯に分布する。



金蔵獅子 大沢野町小羽（「富山県の獅子舞」より）

〔百足獅子〕

氷見（ひみ）獅子——胴幕の中へ五人は



氷見獅子 氷見市十二町（「富山県の獅子舞」より）

どが入り、胴幕は手を挙げて張り、竹の輪は入らない。獅子あやしは天狗が当たり獅子舞棒などと呼ばれる一メートルぐらいの竹の棒で色紙の幣をつけたものを主として持つ。リズムにあわせて獅子を討つ所作をし、曲のテンポは早く活発。氷見地方全域のほか能登地方へ分布している。また、五箇山や南砺（砺波地方南部）地方にも伝播している。幕末の頃、この地方へ出稼ぎに

行った氷見の大工たちが伝えたものだが、胴幕に竹の輪を入れ、さらに竹の輪一本を二人で持つ（胴の中に二列に人が入る）形で加賀の大獅子の輪の持ち方に似ている。氷見獅子の伝播型もある。

砺波獅子——胴幕の中に五、六人が入り胴は竹の輪で張らせ、頭と尾を除く中のものが竹の輪を一人で一本ずつ持つ。胴が大



砺波獅子 砺波市苗加（東方）（「富山県の獅子舞」より）

大きく見え勇壮である。獅子あやしは少年二人が一組で、天狗が加わることもある。棒、ナギナタ、太刀などを持つ。地元では武具を持って獅子に立ち向う「にらみ獅子」と御幣などでたわむれる「踊り獅子」の区別がある。砺波の平野部一円から射水地方南部にかけて分布。

南砺波地方から山をひとつ越えた石川県には加賀大獅子があり、大きな胴幕の中の竹の輪を二列に人が入る形で持つ。ともすれば胴を地面に固定してしまつて太鼓や笛のはやし方がその中に入る。胴は動かず頭だけが舞う。砺波獅子の中にはこの影響をストレートに受けているものがある。

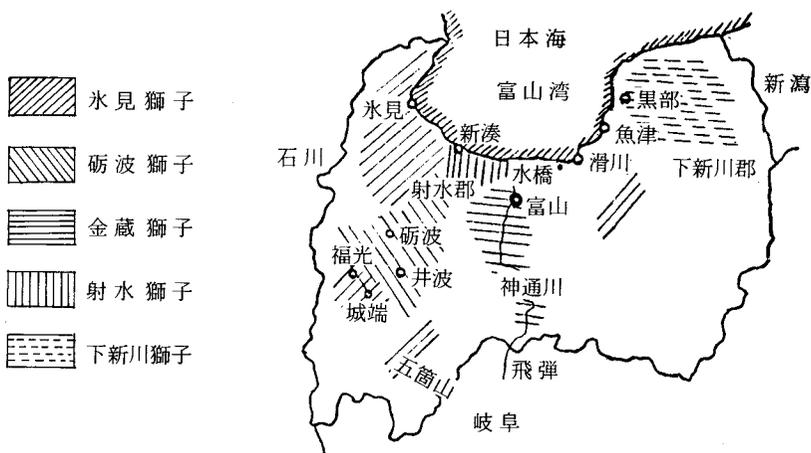
射水獅子——胴幕の中へ五、六人が入り竹の輪は入らない。獅子あやしは花笠をかぶつた少年が二人一組から五、六人ぐらゐ。持ち物は主に太鼓のバチ状のもので紅白、金銀の紙を手綱模様貼り、両端に房がつく。胴の形は氷見獅子、ナギナタ、刀などを持つ点では砺波獅子、花笠をかぶるのは金蔵獅子に似ているが、全体としてはそのどれにも属さない独自のタイプである。新湊市、高岡市の一部、射水地方一帯に分布する。



射水獅子 下加茂村（「富山県の獅子舞」より）

これらの獅子舞は互いに影響し合い、多彩な舞となつて分布している。本来は霊獣であつた獅子は悪霊そのものとして討ち取られる対象ともなり、また、獅子とたわむれることによつて厄災を払おうとする。県内に獅子舞芸能が急速に広まつたのは日清、日露戦争で戦勝にわいた頃であり、各地には七、八十年前後の歴史を持つものが多い。以降、村々では舞の艶やかさを競い、踊り方にも工夫が凝らされて来ているという。

富山県の獅子舞分配概要



❖ 原型は南砺波地方に

単純で軽快な笛と太鼓によるはやしのほか、泉郷獅子舞の大きな特徴は獅子の胴の形である。古くから伝わっている「七五三」「八五三」の踊りは、太鼓二人、笛三人、獅子とり（踊り子）一人のほか、胴幕の中に九人が入り、計十五人で行われる。胴の中には獅子頭を持つ者（頭持ち）のあとに一人、その後六人が縦二列に並んで胴幕を支える半月形の竹の輪を持ち、その後尾が続く。富山県文化財保護審議会委員で砺波市文化財審議会委



加賀獅子

員長の佐伯安一氏は泉郷獅子舞のVTRを見て次のように話している。

「笛の調子から言うと氷見地方の踊りです。踊りの足の振り方、踊り子が持つ棒、それで獅子を刺すようなかつ好をするのも氷見の踊りです。だが、胴の形は胴幕に竹の輪が入る砺波地方のもんです。また、同じ砺波地方でも中部から北部になると二の輪も三の輪も一人で持ち、泉郷のように二人では持たない。大きい竹の輪を二人で持つ形は加賀獅子の形です。そういう獅子舞のスタイルが南砺波地方には入っている。踊り方は氷見獅子だといったが、氷見獅子は南砺波にも入って来ている。踊りは氷見、胴の形は加賀という混合型が南砺波地方には出来ており、それがそちら（泉郷）へ伝わったのでしょう」。

県内の獅子舞は富山県ばかりでなく石川県の加賀獅子を含めて互いに影響し合い、多くの混合型をつくっている。だから、獅子舞を分類する時には踊りの形態、胴の形、踊り子の衣装や持ち物などそれぞれを分けてとらえる必要があるという。泉郷獅子舞は踊りは氷見獅子だが胴に竹の輪が入るのほ砺波獅子。胴の中に二列に人が並ぶのは氷見の踊りが砺波地方などに伝えられたもの（氷見獅子の伝播型）や砺波獅子の中にも見られ、総じて加賀の大獅子の影響を受けている。氷見獅子と加賀獅子が砺波地方でつくった混合型なのである。そして泉郷獅子舞と同様の踊りと二列の胴の形が見られるのは南砺波地方でも城端町、福光町、北飛驒の五箇山地方に限られ、



富山と北海道の獅子舞の関係について語る
富山県文化財保護審議会 佐伯安一委員

「衣装の特徴などから考えると五箇山よりむしろ城端、福光のものに近い（佐伯氏）という。踊りの名称は獅子舞を分類する指標のひとつとされている。泉郷では「七五三」「八五三」の舞が古くから行われ、「天狗の舞」はこの二つの舞を合わせて工夫を凝らした形でごく最近になって創作したものである。「七五三」の名称は富山県内にも多い。特にこの名称が多く現れるのは氷見獅子、氷見獅子の伝播型であり、県教委の調べによると伝播型には七十例中五十二例に「七五三」踊りがあり、氷見獅子では十六例中六例にこれがあつた。

泉郷獅子舞が南砺波地方のものであるという裏付けのひとつとなっている。

ところで「七五三」は「七五三繩（しめなわ）」に通じ、厄災を払う意味がある。泉郷獅子舞の「七五三」踊りは、獅子を悪霊に見たてて沈めるものようだ。一方の「八五三」踊りは、県内のどこにもそのような名称は見当たらない。おそらく「七五三」踊りが泉郷に伝わったあと、リズムを二拍だけ多くし、見物人に顔を向けて踊るようつくり変えられたものと思われる。

四、伝承経路と伝承者

泉郷獅子舞は富山県でも石川県に近い南砺波地方に原型があった。しかし、これを北海道千歳市泉郷にどのような経路でだけ伝えたのか。

これには伝承者を明治二十九年頃、開拓民として現在の富山県富山市水橋小出から入植した山城鶴次郎、伝承経路を「南砺波地方―富山市水橋地方―千歳市泉郷」とする説（以下「山城説」）が有力視でき、これに、泉郷に隣近する長沼町舞鶴を継由して富山県から伝わったのではないかとする説（以下「舞鶴説」）が疑問を投げかける。まず「山城説」から考えよう。

これら泉郷の舞は富山県内の舞に比べて非常に単純なものとなっている。泉郷の古老たちは、リズムも足の振りなどに比べて単純化された部分があると話している。が、舞全体として見るなら大きな変化とは言えない。富山県内では村々に獅子舞があり、華麗さを競い踊り方ややしにも工夫を凝らしたということから、泉郷獅子舞は発祥の地富山県ではすでに失われている素朴さを初期の舞に近い形で保っていると言えそうだ。

❖ 山城説

地元、道内の古老たちには「獅子舞は山城さんから習った」「山城鶴次郎さんが泉郷に（獅子舞を）持って来た」と言う者が多い。

鶴次郎には三人の弟と、姉、妹がいたがその一番末の弟である山城由太郎の妻となったセツさん（室蘭市在住）は「由太郎は今（昭和五十五年二月）生きていれば八十一歳になるが、若い頃はケヌフチで獅子舞をやっていた。そしてこの獅子舞は鶴次郎さんが越中富山のものを教えたんだと言っていた」と語っている。由太郎のすぐ上の兄も獅子舞は得意で、このことは泉郷の長老格信田信太郎さん、故



辻ヶ堂高麗社

・白井政治さんも語っている。泉郷で聞く「獅子舞は山城さんから習った」との話での「山城」は、鶴次郎自身ではなく、山城兄弟のことだと考えるのが妥当だ。

鶴次郎を初めとする山城兄弟の故郷は、泉郷獅子舞の原型があった南砺波地方とは反対側（県の東側）、中新川郡上条村大字小出―現在の富山市水橋小出であり、そこで育ち渡道するまで水橋を離れなかった。その鶴次郎がなぜ遠く離れた南砺波地方の獅子を覚え、伝えることができたのか―。この疑問に答える富山県教委の調査結果と、かつてケヌフチ（泉郷）を売菜の行商で歩いていた高橋佐一郎老人（富山市水橋町辻ヶ堂在住）の話が

ある。佐一郎さんは鶴次郎の甥にあたる。

佐一郎さんは鶴次郎が生まれた水橋小出から十キロほど離れた水橋町辻ヶ堂に住み、ここにもやはり獅子舞がある。この辻ヶ堂の獅子舞は、赤と黒との漆に金粉を塗った獅子頭の後に一列に四人が入って、半月形の竹の輪の入った胴幕を支える。頭(かしら)の前で踊るシシウチ(獅子とり)はチリメンの赤い袴を着、モンペをはいて剣、ナギナタ、太刀を振るって獅子を討ち取る。重要なことは、県教委の調査でこの辻ヶ堂の獅子舞が富山市以東では例外的に「砺波地方から明治初年に伝わった」とされている点だ。山城鶴次郎の出身地の近くに泉郷獅子舞の原型があった砺波地方の獅子舞がポツリと分布しているのは偶然だろうか。

しかし、これだけでは水橋が南砺波地方——千歳市泉郷の伝承経路の中継地であったとは言えない。何よりも、泉郷獅子舞は胴幕の中の人縦二列に並ぶが、辻ヶ堂のものは一列であり、胴の型が大きく食い違うからだ。

佐一郎さんは水橋町辻ヶ堂の獅子舞が奉納される「高麗社」の近くに住み、大正初期から自らも獅子舞をしていた。その佐一郎さんが売薬行商で初めて千歳に入ったのは大正中頃のことだ。追分、由仁、千歳、恵庭などで薬を売り歩き、ケヌフチでは当初親せきである山城の家に宿をとり、後には旅館に泊まって行商をした。

「大正七、八年頃、ケヌフチの松原温泉

(旅館)に宿泊していると信田温泉の方から太鼓の音が聞こえて来た。それで見に行くところから獅子舞をやっており、その踊り方がピョンピョン跳びはねておもしろいので富山に帰ってから父親に話した。すると父親は、それは昔ここでやっていた『カラスの横とび』だとい、『小出のアンマ(鶴次郎を指す)』がここを覚えてケヌフチで教えたのだ』と話していた。鶴次郎は青年時代水橋に奉公に出ており、数え十九歳で渡道したという。だから水橋で獅子舞を覚える機会は十分にあつたわけだ。

ただ、「昔やっていたカラスの横とび」は現在の水橋では行われていない。佐一郎さんは「私は踊ったことはないが、父はその踊りを踊ったことがあると話していた」という。佐一郎さんの父親(常次郎)は明治五年の生まれで、獅子舞に参加したのは明治二十年頃からと考えられる。この時期に今に伝わらない古い型の獅子舞があつたとするならば、明治十年生まれで数え十九歳まで水橋にいた鶴次郎もその獅子舞を十分に覚えられたはずだ。その獅子舞が胴幕の中に縦二列に人が入って踊る泉郷と同様の舞であつたかは確証がつかめないが、県文化財保護審議会の佐伯安一氏は「水橋や隣の滑川市付近は獅子舞についてはいわば空白地帯であり、数は少ないが様々な地方から様々な種類の獅子舞が入り込んでおり、水橋辻ヶ堂の舞は砺波から習っている。その『砺波』は城端町、福光町とも考えられる。古い型の踊りというのは水橋周辺にあつ

た加賀獅子と氷見獅子の影響を受けた胴幕の中の人縦二列になる型だったと考えてよいのではないかと語る。とすれば、南砺波地方——水橋——千歳市泉郷という経路は成立し、伝承者は山城鶴次郎とされるわけだ。

まず、伝承者を山城鶴次郎とし、鶴次郎が渡道したころの千歳やケヌフチと、鶴次郎とその周辺の人々についてを次に見たい。



ザブトンを頭替りに獅子舞を見せる高橋佐一郎さん

❖ ケヌフチ原野

石狩と胆振の国境の山間に源を發したケヌフチ川の混濁した流れは、馬追丘陵の南すべつを回り込むように南西へと流れる。コムカラペツを従えると急に北西へとやや直角に方向を変え、二十キロ弱の流れを馬追沼に注ぎ込



馬追沼干拓前のケヌフチ原野

む。低い山々の間を縫って流れるケヌフチ川の左右に、百メートルから五百メートルほどの幅で平地が続く。その平地は、いよいよ馬追沼、そしてそのすぐ南西に広がる長都沼を臨むと、広大な馬追原野へと広がって行く。流れに沿った細長い平地と、アイヌの人々がケヌフチプト（プトは川口の意味）といった馬追原野へ開け行くあたりを合わせて、明治二十七年に行われた植民地撰定測量では「ケヌフチ原野」と呼んでいる。面積約六百二十五ヘクタール。わずかばかりの丘高部を

除いて半分は湿地、あと半分は二、三十センチも掘らないうちに火山灰の出でくる平地である。当時の植民地撰定報告書には「本原野ノ土壤ハ一般ニ薄ク、地味良好ナラスト雖、低地ハ概シテ水田トナシ、高地ハ拓キテ宅地又ハ畑ト為サハ、農家経済ノ道立チ一家ノ生計ヲ営ムニ足ラン」（北海道植民地撰定第二報文）と記されている。

高丘部にはナラ、カシワの大き木が密生している。が、低地に至るにつれてまばらとなる。代わりにスズタケ、ハギ、カヤ、ヤチタモが雑生し、湿地にはヨシが一面に繁って、春にはわずかにミズバショウが色どりを添える。ケヌフチ川の水は飲料水には適さず、流れは春になると融雪に勢いを得て氾濫した。原野には数多くのキツネ、ウサギが駆け回り、シカの姿も多い。エゾライチョウがはばたき、今は干拓された馬追と長都の沼にはカモ、オシドリが巣をつくる。秋になるとガン、ハクチヨウが群をなして飛来した。

明治十四年の千歳村の耕地はわずか七町余りであった。そこに明治政府の移民政策によって明治十七年には山口県移民団三十三戸が入植する。船で小樽港に入った一行は徒歩で銭函、札幌へと進み、輪厚で二泊目を迎え、四日目に千歳に入ったという。同十九年には第二次山口県移民団七十六戸が入り、その後自由移民も入植し始める。

ケヌフチには明治二十年ごろ高橋久造ら二、三戸が入植する。その高橋の名をとった「高

橋道路」と呼ばれる道路が今も泉郷にある。低地に立ち木の少ないケヌフチの地形は、井戸を掘らねばならぬ飲料水の不便を差し引いても、開墾が容易であり、入植には適した土地であった。同二十四年には野本源蔵がこの地で千歳では初めてという水田作りに成功。翌二十五年には北海道炭礦鉄道室蘭線が開通し、現在の千歳市街よりも追分などの駅に近いケヌフチがむしろ脚光を浴びる。

現在の由仁あたりまでを含む千歳の植民地区画測量は明治二十四年に始まり、二十七年



現在のケヌフチ=泉郷



移民小屋掛の景（「千歳市史」より）

のケヌフチ原野の撰定測量で終わる。当時のケヌフチは「ケヌプチプトには農家多く水田に従事」（明治二十六年「北海道殖民地撰定報文」）していたとの記録がある。このケヌフチも撰定測量以降、本格的な移民の時代を迎える。信田太七は明治二十七年五月、二万坪の未開地の貸下許可を受けて入植したが「当時、キ（ケ）ヌフチの地は未開不毛にし

て芽屋の掘立小屋五、六戸あるに過ぎずして農耕未だ拓げざる寒村」（「北海道開道五十年記念誌」）であったという。

移民たちは吏員から土地の引き渡しを受けるとヤチダモ、ハンノキ、ヤナギなどの幹、枝、皮を使って六坪から二十坪ほどの仮小屋を作って住まいとし、そして休む間もなく未開の地へと挑んだ。

◆ 鶴次郎と周辺の人々

明治二十八年、母と五歳下の弟・興次郎、妹らと共に富山県中新川郡上条村字小出を後にした鶴次郎は翌二十九年、ケヌフチに入った。父・与七と嫁いだ姉は郷里に残った。家は庄屋であったとも言いが父の代で傾き、傷心の旅立ちであった。

一行の渡道は同郷の森井平兵衛一家を頼つてのものだったようである。平兵衛の郷里は小出から東にやや離れた中新川郡中加積村。明治二十四年に渡道し、札幌で魚類の商いや小作をして蓄財した後、笠原喜助の農場監督人として小作七戸とともに同二十九年にケヌフチに入っている。長沼町在住の山城キミヨさん（七〇） 〓山城興次郎の息子・盛の妻 〓は、「鶴次郎さんと森井さん一家は一緒にケヌフチに入ったと聞いている。興次郎は札幌で二年ほど奉公して後からケヌフチに入った」と話している。



山城鶴次郎

平兵衛の入植した土地は他人が開墾途中で投げ出したものであり、成墾地はわずか四町歩。あとは身のたけを越えるヨシ原であった。平兵衛は小作と共にここを切り開いた。明治四十一年道庁発行の「移住者成蹟調査」には「成墾地四町歩は伴ひたる小作人七戸に配当し、別に一戸に付一町歩の未墾地を割り当て、自家は一町五反の未墾地を開墾せり。幸にして自家労働者多く、平兵衛夫妻、長男夫妻、弟妹等一同何れも農圃に出て熱心労働に従事したるを以て作業大に進み、翌三十年には全く之を墾成し、全部に作付することを得」と記され、その後他の未墾地も購入して水田二十町歩、畑八反などを有する成功者となる。

一方、鶴次郎の一家も現在の福田義政さん宅付近に何がしかの土地を持って開墾するが、



山城由太郎



山城興次郎

やがてケヌフチ、ホロカカの山に豊富なナラ、カシワの木に目をつけ、持ち前の野心を広げて造材で身を立てようとする。甥の高橋佐一郎氏は「叔父は無学だったが腹のすわった男で最初は開拓をしていたがその後、ホロカカの山を買って造材を始めた」、また、室蘭市在住の山城セツさんは「ホロカカの山は全部オレの山だったと鶴次郎さんが話していた」という。造材の事業が軌道に乗ると鶴次郎は札幌の弟・興次郎を呼び寄せる。明治三十三年には

富山県の中加積村から平兵衛の親せきに当たる森井ヨキを妻に迎え、厳しい労働と生活の日々に幸せが芽ばえる。しかし、それも長くは続かなかつた。間もなく兄弟と辛苦を共にした母が倒れ、世を去る。

鶴次郎らの造材の事業は順調に進んだようである。家の普請をしてもらったという人もおり、また現在の極楽寺の普請にも「栗山から木を引いて来た」とも言う。帳場は他人に任せて自らは栗山方面の山にも手を出し、郷里に残っていた父・与作と継母タツ、その間に生まれたヨウ次郎と由太郎の四人をケヌフチに呼び寄せる。だが、この勢いも明治の終わりまでしか続かず、事業に失敗した鶴次郎は明治四十五年に上川郡土別村へ移り、再起を図る。そして、さらに新天地を求めて大正二年には台湾へと渡る。弟・興次郎も角田（栗山町）、長沼、鷗川を回り、大正十三年には兄の後を追って台湾へ。森井の家族も同じく台湾へ渡り、「向こうでは家族のようにつき合い、月に何度か集まっては芸達者な興次郎が笛を吹いて酒を汲み交わした」（山城キヨミさん談）。

鶴次郎は台湾へ渡ってからかなりの成功を収める。長崎県在住の鶴次郎の孫・山城哲一さん（五三）によると、鶴次郎は大正二年からの約三十年間にサトウキビ畑五十町歩のほか五、六の製糖、デンブン工場を持つよう

になる。しかし、その間、ヨキとの間の二男二女のうち頼りにしていた長男が死去、昭和二十年の終戦を迎えるとすべてを失って帰国し、弟・興次郎は長沼へ帰る。鶴次郎はこの時七十歳に近い高齢である。鶴次郎は二男・鶴次（故人）一家とともに長崎県に永住の地を求め、この頃、かつての勇猛さはすでになく、「毎日ただぼんやりと過していた」という。そして五年後の昭和二十五年、七十四歳の生涯を終え、妻・ヨキもその三年後に世を去っていく。

❖ 舞鶴の獅子舞

泉郷獅子舞の伝承ルートに関するもうひとつのものに「舞鶴説」がある。これは、明治四十年代にケヌフチの北隣りの長沼町舞鶴地区に泉郷獅子舞と同型の獅子舞があったという同地区の古老の話、また、獅子頭が舞鶴から泉郷に持ち込まれたという証言によるものである。ただ、舞鶴の獅子舞の「型」については同じ時代、同じ場所に住んでいた二人の老人が異なった証言をしていること、さらに泉郷に獅子頭が持ち込まれたという年代は大正に入ってからであり、泉郷では明治末期から獅子頭が使われていたなど「舞鶴説」の確実性を薄める要素が強い。

舞鶴の獅子舞について語るのは明治二十三年生まれで札幌市に住んでいる永森ヤスさん



長沼町舞鶴神社

(九〇)である。

ヤスさんは数え九歳で富山県から渡道し、一家は厚真に入植。二十歳で舞鶴にあった島津農場の農家に嫁いだ。嫁いだのは明治四十二年だが、「私が嫁いだ前から舞鶴には獅子舞があった」という。その獅子舞とはヤスさんの夫の父親がやはり富山県の出身で、そこから伝えたものだとい、「獅子の胴幕の中には八人か十人ぐらいの人が二列になって入り、獅子頭の前では子供が七、八人、タスキをか

けて弓のようなものを持ってついて回る。獅子討ちは二人か四人で長い棒のようなものを持っていた。獅子頭は黒っぽかった」。しかしヤスさんが嫁いだ時から二、三年後に獅子舞は途絶えてしまい、その後「頭はケヌフチの小林温泉（現在の信田温泉）の前の方へ持っていった」と語っている。胴幕の中の人が縦二列に並ぶのは加賀の大獅子の影響を受けたもので泉郷獅子舞と同様である。しかし、獅子討ちが二、四人であること、また、タスキをした子供が六、七人いることなど異なった点もある。獅子頭は泉郷にも「舞鶴神社から買って来たのだ」と話す人もいる。だが、舞鶴の頭が「黒っぽかった」のに対し、泉郷のそれは白木であり、持ち込まれたとされる以前にすでに使われていた。つまり、舞鶴獅子舞と泉郷獅子舞の頭は別個のものということになる。

小樽に住むもう一人の証言者・角谷従政さん（七八）は明治三十四年の生まれである。二歳の時に舞鶴の島津農場に入った従政さんは、十歳前後の頃に兄に連れられて青年団の集会場に獅子舞の練習を見に行っている。ヤスさんが見たという明治四十二年よりやや後である。その獅子は胴幕の中に一列に六、七人が入り、踊り子は紅白を巻いた棒を二本持ち、花笠も持って踊った。「その花笠がなんとも言えなくきれいだったのを覚えている」。

また、胴幕の中には泉郷で使っているような竹の輪は入っていないかったという。従政さんの口ずさんだ笛の調子は、泉郷のものよりスローテンポでリズムも全く異なる。従政さん自身、現在の泉郷獅子舞を見ているが「それとはずいぶんちがうものだった」と話している。また獅子頭について従政さんは舞鶴のものは黒色で、大正十二年ごろ舞鶴神社の中で見たことがあり、漆を塗った立派なものだったという。当時、島津農場は四十戸ぐらいだったとい、同じ時代、同じ場所に二つの異った獅子舞があったとは考えづらく、どちらの証言がより正確であるかは定かではない。ただ、舞鶴に何らかの形の百足（むかで）獅子があったことは確かだといえる。

五、 変遷

❖ 明治末から戦前にかけて

明治三十年代の泉郷獅子舞に関する証言や記録は今のところない。しかし、明治四十年代から大正年代に入ると、ケヌフチの人々の生活との中で親しまれていた獅子舞の輪郭が浮かびあがってくる。

まず、泉郷の人々やかつてそこに住んでいた老人たちの記憶から、明治末期から昭和にかけて泉郷獅子舞を担った人の顔振れをあげてみよう。

◇明治末期―山城興次郎（笛）、橋場タジ（太鼓）、坂田幸作、信田喜代吉、山城ヨウ次郎（以上頭持ち）、山城由太郎（獅子とり）

◇大正―鈴木彦太郎、信田一郎、白井政治（以上獅子とり）、信田信太郎、富田佐一、山岸弥三郎、広世事故（以上頭持ち）

◇昭和二〇十年頃―高島時次、高島時松、信田広喜、鈴木直一、大笹晴二、岩本正生、岡本正一、富田毅、吉川勝視、村上正光、小栗行男、福田数雄、奥村文洞

◇昭和十五〜二十年頃―吉川誠、坂田秀五郎、高橋清、稲垣勝康、信田外喜男、清水順一、開発幸作、信田登、今井進、大笹千早、土居清松、遠藤道雄、鈴木秀夫、信田豊次

以上は終戦時までの主な顔振れであるが、各年代にまたがって獅子舞を続けて来たものもあり、「その年代以降参加していた」と考えてよい。例えば山城由太郎は、その妻・セツさんが「明治四十四年に信田温泉の養女に入った時に、由太郎が獅子とり、ヨウ次郎が頭持ちをしていた」といい、この時由太郎は十代の前半であった。頭の前で踊る獅子とりは小柄な者が割り当てられることになっており、富山県内では多くは子供である（獅子とりⅡ獅子あやしⅡは伎楽では獅子児で子供の役割）。これに山城兄弟の由太郎が刈り出されたもののように、以降由太郎は昭和の初めまで踊り続けている。

明治末期には比較的年齢の低いものから高いものまでが入り混じって獅子舞をしていたようだが、大正年代に入ると獅子舞は「青年



昭和14年9月20日 鈴木秀夫（獅子とり）らが剣淵神社に奉納

団」の手に任せられ、教え十五歳から二十五歳までの年齢層がその第一線に立つ。普通、初心者はまず簡単な「胴」の役を修業し、頭持ちや太鼓、笛などのはやし方、獅子とりへと進んだようである。この時代に獅子舞の指導的な役割を果たしたのは山城ヨウ次郎であったようだ。大正五、六年頃から獅子舞を始めたという信田信太郎さん（79）は「山城さん（ヨウ次郎）は頭持ちでも何でもやった。その獅子だつたらまるで生きていたようだった。頭持ちの絶対のコツは頭の下アゴを見せないことだ」といい、笛や太鼓のたたき方もやかましく教えた」と語っている。このことは故・白井政治さんも話していたことである。ヨウ次郎はこの頃、二十歳をやや出た程の年頃で、

その指導した獅子舞は、現在のものよりも複雑だった。信田信太郎さんらが舞ったものも「踊りの流れは同じなのだが拍子が少し違う。『七五三』も『八五三』も昔は同じ踊りを獅子の向きを変えて二度舞う。『花』をもらうともう一度舞う。また、その三度ともが太鼓の調子や足の振り方を少しずつ変える。今の踊りは一度しか舞わないし、太鼓や足の振り方なども簡略化されている」（信田、白井さん談）。当時の泉郷は八十戸ぐらゐの農家があつて、青年団には二十数人がいた。

「越中富山の葉屋さん」として親しまれた高橋佐一郎さんとその弟がケヌフチに入り、獅子舞を見たのは大正七、八年のことだ。そのことを富山に帰って父親に話すと「それはカラスの横跳びだ」と言われる。そして、郷里の水橋辻ケ堂で盛んであり、自らも踊っていた獅子舞のうち「カタナ」と「ツルギ」の二種類をケヌフチの人々に教えようとする。昼間は菓の行商、夜になると集会所へ出かけ行つて十日間ばかり教えたが、太鼓と笛が複雑で十日ばかりの短かい期間ではとうとう教えることが出来なかつた。この時の様子を信田信太郎さんは「㊦高橋（㊧は高橋さんの屋号）は上手だつた。『富山では…』とやつて見せたが向こうのはどうにかすると獅子とりがゴロリと転がつてしまうものだった」と語っている。この後、昭和二年頃には高橋さ

んに依頼して富山県から胴幕をとり寄せたこともあり、高橋さんとケヌフチの人々のつき合いは売菓の「商売」以外に獅子舞を通じて昭和二十年頃まで続く。

保存会の前会長の岩本正生さん（64）は「大正二年三月生まれが獅子舞をしたのもやはり数え十五歳、昭和の初めからである。当時の青年団は「男三十三人、女四十一人だった。獅子舞は十四、五人で足りるから、あとのものはそれについて歩いたり、神社の活動写真の世話などをした」という。獅子の先頭に天狗を露払に立てて歩かせた年もあり、「越中おわら節」を全部落舞つて歩いた（昭和十五年頃）こともあつた。「富山県人」としての心がまだ息づいていたころであろう。

❖ 戦後の獅子舞

戦中、戦後の混乱の中で泉郷獅子舞も中断を余義なくされた。しかし、平和がもどり戦地から人々が帰るにつれ再開の兆しも見え始めた。泉郷に電灯がともつたのが昭和二十二年暮、バスも通い出した。青年団の若者たちはひと月に一度は「のど自慢」や素人芝居を催し、村も明るさをとりもどして行く。

獅子舞が再開されたのは昭和二十五年のことである。当時について信田信太郎さんは、「馬車を出して、馬に食わせるエサも持つていつて、泊まりがけで舞つた。何しろ村中回る



昭和35年 全国レクリエーション大会での泉郷獅子舞

のに二日間かかったのだから。太鼓の皮は札幌へ持つて行つて豊平川の近くの皮屋で切り詰めて張つた。胴幕はクレヨンで色を塗りながらやつたものだ」と話している。

昭和三十年代に入ると、傷みの激しい初代の獅子頭は千歳神社に奉納され、同神社の宮司・近藤義雄さんから二代目の頭が寄贈された。この獅子頭は一人獅子用の小さなものだったので、取手をつけるなどして改造された。また、唐草模様様の胴幕も新調されたが、生地が悪くすぐに傷んでしまったため、再度昭和

二年に富山県の高橋佐一郎さんに頼んでとり寄せた紅牡丹模様の年代物を使ったというエピソードも残っている。郷土芸能としてテレビへの出演もあった。

しかし、農村からの青年層の流出は後継者の育成を危くした。このため昭和三十六年には地区全戸が会員となつて保存会を結成した。以降、踊り手の減少の中で保存会を初め4Hクラブの若者たちが細々と舞い続けて来たが、九人だった胴幕の中の人数は七人となり、門

六、獅子頭

古老がよく話題にするのは獅子頭のことである。獅子頭は明治年代から戦後まで使っていた初代の頭、その後作られた小型の二代目、昭和五十三年に初代の頭に似せて富山県井波町の彫り師に彫ってもらった三代目がある。

初代の頭は現在、千歳神社に奉納されている。語り草となるのはこの初代の獅子頭のことである。泉郷に多いカツラの木で出来ており、漆塗りをしていない白木である。この頭は、明治末期に山城由太郎の妻・セツさんが見た記憶を「その獅子頭といったら大きくて重そうで、漆などは塗っていない白木だが、汚れて古めかしく、とても恐い顔をしていた」と話している。「カツラの白木」「恐い面構

付けをせずに神社への奉納だけで済ませ、凶作のために獅子舞を中止した年もあった。四十七年以降、泉郷獅子舞はほとんど地域に姿を見せなかつたが、五十一年九月、「若者たちの手で伝統を残そう」と4HクラブとOBの手により再開され、農家一軒一軒を練り歩いた。盛衰を繰り返した泉郷獅子舞は泉郷だけでなく、千歳の民俗芸能として五十四年十月、民俗芸能無形文化財第一号に指定された。

え」「とにかく重い」というのがこの頭にまつわる様々な語の共通点である。

「とにかく重い頭で、相当の力持ちでなければ上手に繰ることは出来なかつた」と信田信太郎さんも語る。「頭持ち」は重労働であった。この頭を繰るためには米一俵を軽くかつげるほどの力持ちでなければならぬ。そのため青年たちの間では腕相撲が流行して力比べをやつた。練習の時には重過ぎて長時間練習出来ないで耳や舌をはずし、軽くして舞つた。しかし、それでも重過ぎるとこの頭の内側を削つたのは昭和になつてからのことである。この頭には現在でも目に銀紙が貼りつけられ、ところどころにクレヨンで塗

られた跡が見られる。白木だったため、あるいは傷んだ部分の補修のために塗りつけたものである。

また、カツラの木で漆塗りでない（白木の）頭を舞いに使うというのは珍しい。獅子頭は、富山県内ではかつて仏像を刻む職人である仏師（ぶつし）などによって作られていたという。現在ではほとんどが井波という町の木彫職人によって作られている。獅子頭には桐材の木目が細かくて丈夫な根元の部分（直径四十五センチ）を用い、ノコで型をとり、ノミで荒彫りし、内部をくり抜いて乾燥させたあと仕上げ彫りをする。彫りの終わつた獅子頭は塗り師に回され、傷みを防ぐためにまず表面に麻布を張り、次に漆塗りをする。重さは四、五^キほどとなり、全工程で十カ月間程が費される。昭和五十三年に三代目の頭を作る際、カツラで白木の初代の頭を井波町に持参し木彫職人に見せているが「井波ではカツラの木は使わず、ここで彫られたものではない」といつている。

泉郷に多かつたカツラの木で出来ているため「地元で腕に覚えのある者が彫つたのではないか」、また、白木で重量が約六^キと重過ぎるため「神社などに奉納するために彫られたものではないか」などの推測がされる。「私が入植したのは大正二年だが、その時から八、九年前にケヌフチで作られたと聞かされた」（遠藤定さん）明治三十一年生まれ）と

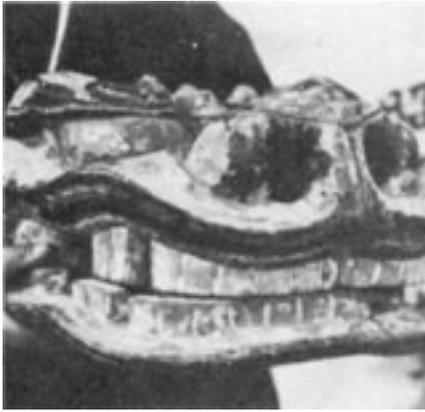


獅子頭の中と持ち方

も言われ、それが事実とすれば明治三十七、八年には獅子頭が登場していることになる。また頭がない時代には棧俵（さんだらわら）俵のフタ（フタ）を頭がわりに使ったとの話もあるが、それらの話はいずれも裏付けがとれないでいる。

以上のように初代の獅子頭の由来は今のところ定かではない。だが想像が許されるなら——明治二十九年、ケヌフチに入植した山城鶴次郎はその後合流する弟・興次郎の笛で祭りの余興に棧俵を頭がわりに獅子を踊る。三十

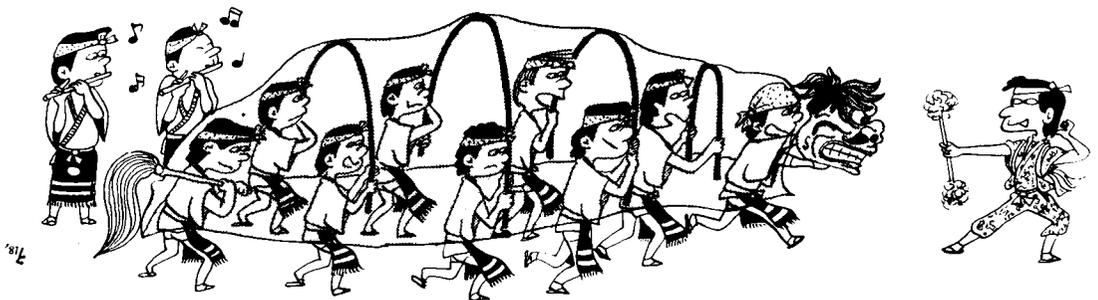
年代の中頃に入植者が増えるとなかには腕に覚えのある者もあり、地元にも多いカツラの木で何カ月か、あるいは何年かをかけて頭を作り、胴幕を買って明治三十七、八年頃からは本格的な獅子舞が始まった——ということになるのか。



下村加茂 加茂神社蔵



文明13年銘 八尾町布谷 柴野社蔵



胴幕図解

七、古老の話

高橋 佐一郎さんの話

富山県富山市水橋在住
明治三十二年一月生れ

▲ケヌフチと売薬▼

私は売薬商で大正の中頃に初めて千歳に入った。ホロカ、ホロナイ、オルイカ、ケヌフチ、長沼、漁太、恵庭、三川、追分、栗山などを回った。私の父（常次郎＝明治五年生まれ）は礼文の島へ三十年間通って肥料のタラカス、ニシンカス、ボーダラなど海産物を商っていたが、大正年間にかかったらすたれてやめてしまい、それで私も後を継がずに売薬商をやった。

ケヌフチには親せきの山城という家があった。そこには由太郎・セツの夫婦と子供、ジイさんとバアさんが住んでいた。初めのうちはそこに宿をとって行商して歩いた。親せきがあったのでケヌフチには得意先がたくさんあった。富山の出身者も多く、私の話す富山の方言を懐しがついていた。売薬行商は年一回、家々に置いてある薬箱に薬を入れかえに行くのだが、二、三人の手下を連れて行き宿

で指図をしてあちこちを回らせた。薬を入れかえるよりも歌ったり踊ったりしてお得意さんを楽しませる。だから「薬屋さんはおもしろい人だ」とよく言われた。大きなトウキビを二本もらい一本は食べ切れなくて腰に刀のように刺して歩いたこともある。だが、ケヌフチの土地はサラサラの火山灰で、これじゃ何も穫れないだろうと思った。栗山の土地とは全々がってかわいそうだった。昭和五六年だと思うが二年続きの凶作になって何も穫れずにひどいものだった。病人も出たのか薬箱もカラッポで、代金はあとでいいからといって薬を入れかえてやった。翌年になると大豊作で、代金がおもしろいように集まった。大正の頃のケヌフチはケヌフチ川のところは竹やぶですごく歩くのが大変だった。夜はキツネの目が光り、恐しくて歩けなかった。舞鶴ではヨシ原で道もわからない所を地下たびをはいて分け入った。漁太も回ったが、ケヌフチの山に漁太からみんな炊き木をとりに行っていた。昭和二十年の春に千歳、長沼を弟に回して私は栗山を歩いたが、その後病気になるって行商をやめた。ケヌフチにはほんと



高橋佐一郎さん

にいいお得意さんがあった。大正年間に神社に「越中富山◎高橋」と屋号の入れた提灯を贈ったが、それはもう残っていないだろう。

▲獅子舞との出会い▼

ケヌフチで獅子舞を見たのは大正七、八年の頃だ。私と弟が松原温泉に泊まっていたら信田温泉の方から太鼓の音が聞こえて来た。それで見に行くと獅子舞をやっていた。そのことを父親に話したら、それは「カラスの横

跳びだ」と言った。今、辻ケ堂でやっている獅子舞の前にあつた芸で、ピョンピョンと跳びはねる。父は踊ったことがあるといった。その古い踊りは近くの村に教えてやったがとだえてしまった。辻ケ堂では明治四十年頃から獅子舞がとだえて、私が十七、八歳の頃若い者が年寄りの話を聞きながら復活させた。

私はケヌフチに「カタナ」と「ツルギ」の二種類の踊りを教えてやろうとした。夜に十日間ほど教えたが笛と太鼓の調子が難しく覚えてられなかったようだ。あとになって「薬屋さん気の毒だが胴幕が傷んでいるので買ってくれ」と頼まれた。私の村で染めたら三十五円かかった。それを送ってやったら大変喜ばれた。

ケヌフチに獅子舞を教えたのは山城鶴次郎だ。私の父が「小出のアンマがこの獅子を教えたんだ」といつていた。ここの古い獅子舞を覚えていつて教えたんだ。

▲山城 鶴次郎と家族▼

山城鶴次郎は私の母の弟で、兄弟が多かった。無学だったがハラのすわった男で男前だったようだ。水橋のお婆の家が明治八年頃から繁盛していて、鶴次郎はそこに奉公に来ていた。それが数え十九歳の時に母親と兄弟と一緒に北海道に渡った。父親の与七と私の母は富山に残った。鶴次郎らはケヌフチの福田

さん宅のところに入って開拓をしたが、その後、ホロカノ山で造材をやった。家を建ててもらったという人もおり、だいぶ幅をきかせていたようだ。ケヌフチで鶴次郎の母親が死んだあと、父親の与七と後妻と、その子供たちがケヌフチに移って大笹さん宅のところへ住んだ。私ほ五、六歳のころ母親に連れられて墓参りに行ったが福田宅の鶴次郎のところへ泊まると「水田に落とすやろ」と脅かされたのを覚えている。その後、造材で失敗して鶴次郎は台湾へ行った。鶴次郎の実弟の興次郎も造材を手伝っていたが、この人は尺八が上手だった。やはり台湾へ行った。

故・白井 政治さんの話

千歳市泉郷

明治三十四年生れ



故・白井政治さん

私が子供の頃は盛大に獅子舞をやっていた。子供たちはみんな獅子の後をつけて回ったものだ。私が獅子舞をしたのは十五歳、大正五、六年頃で獅子とりをやった。獅子舞をするものはみんな化粧をし、衣装も現在のものとはほぼ同じだ。獅子は尾が太く、麻だった。頭は重いものだった。胴幕は私がやっていた時、古くなったというので新調した。それがすぐダメになってまた新しいのを買った。それは越中の薬屋の高橋佐一郎さんに頼んで作ってもらったもので三十五円だった。三十五円といえど大金だった。私が青年を抜ける頃のことだ。

佐一郎さんは㊦の屋号で、その弟は㊧だったと思う。㊦は獅子舞が上手で、その親せき系統（山城）が入植して来て獅子舞をやったのだ。

私が獅子とりをやる前に鈴木直一さんの親の兄弟（鈴木彦太郎？）が「七五三」の獅子とりをやり、信田喜代吉さんもそうだ。喜代吉さんの獅子舞は有名だった。

信田 信太郎さんの話

千歳市泉郷

明治三十四年生れ

▲大正時代のケヌフチ▼

私は山城ヨウ次郎さんに獅子舞を教えても

らった。踊ったのは大正五、六年のことだ。

その時代の泉郷は遠藤（道雄）さん宅の所ぐらいまでしか開けていなかった。ナラ、カシワの木がたくさんあって、枝をノコで引いたりして開墾した。うちのジイさんがここに来た時は由仁から入ったということだ。今はまっすぐな道だが当時は峻しいザクザクの道だった。開拓でかんがい溝が出来たのは大正年代の未だ。みんなが出面に一月も二月も出た。タコ部屋のようなのがあって土方を五、六十人も常時置いて、みんな手仕事でやった。飲み水には不自由した。湧き水を細いトイで引いて使ったものだ。

▲獅子舞▼

山城ヨウ次郎さんは今の郵便局の前の方にいた。私は頭持ちばかりやったが、若い頃には「七五三」も「八五三」も獅子とりを覚えていた。山城さんは頭持ちでも何でもやってまるで生きているような獅子だった。絶対のコツは頭持ちは下アゴを見せないことだと言



信田信太郎さん

っていた。太鼓も同じ調子で打ってはダメで、笛についてもやかましく言った。

同じ泉郷の獅子でも昔のと今のとでは違っている。尾っぽを持つのは今はない。それに今は獅子が回らない。昔は「七五三」なら二回続けて舞う。一回舞ったらグルリと向きを変えてもう一度舞った。その回るのが大変で獅子の後の方なんかは振り回されてコエ溜めにはまったりした。今どころでない山道だったから、まる一日村中を回るとタビに穴があいた。踊る時間は同じぐらいだが繰り返しやるその一回一回の太鼓のたたき方がちがう。「七五三」も「八五三」もそうだから幕の中で踊る者の足の振り方などもちがいが、間違いやすかった。

大正の中頃、葉屋の高橋佐一郎さんとその弟さんが獅子頭を持ちたりして富山県の獅子舞を教えてくれた。神社の下に公民館があって高橋さんは「富山では」と舞ってくれたが、向こうのはどうかしたら獅子とりがゴロリと転がってしまう。

▲獅子頭▼

昔の獅子頭（現在、千歳神社に奉納されているもの）はとにかく重かった。練習の時には耳や舌をはずしたりして踊った。そうするとだいたい軽くなった。だが重い頭を繰るためにはいつも鍛練していなければダメだとい

うので、若い者の間では腕相撲がはやった。田中兼吉、富田佐一、山岸弥三郎さんは十四歳の時に米一俵をかついだ豪傑だったから頭持ちをやった。頭は白木だったから目や歯に銀紙を貼ったりクレヨン塗ったりしたこともある。胴幕も傷むとクレヨンを塗った。頭が重過ぎてこれでは体が持たないというので内側を削って軽くしたのは私が獅子舞をした後の時代のことだ。

山城 セツさんの話

室蘭市在中
明治三十四年生れ

私は数え十一歳（明治四十四年）に信田温泉の養女に入った。最初に獅子舞を見たのはこのころで、由太郎が獅子とり、そのすぐ上の兄のヨウ次郎が頭持ちをしていた。その獅子頭といったら大きくて重そうで、漆などは塗っていない白木だが、汚れていて古めかしく、とても恐い顔をしていた。

鶴次郎さんは福田さん宅のところに住んでいて、入植して何年か後にお寺（極楽寺）のところ立派な家をたてて富山に残っていた親を呼んだという。鶴次郎さんは「ホロカの山は全部オレのものだったんだぞ」といっていた。獅子舞はこの鶴次郎さんが越中富山の



山城セツさん

を教えたということを由太郎から聞いている。私は数え十七歳で由太郎に嫁いだ。その前は旅館を手伝っていたが、ケヌフチは水が貧しくて温泉のお湯を炊事に使った。また温泉だということでケガの薬がわりに塗ったりした。今の温泉の水は濁っているそうだが、当時は澄んでいた。でも、松原温泉のお湯は濁っていた。

山城 キミヨさんの語

長沼町在住

明治四十四年生れ

鶴次郎さんと母親、興次郎、妹と一緒に北海道に来た。鶴次郎さんらは渡道してすぐ森井さんとケヌフチに来たが、興次郎は札幌で一、二年奉公していた。だが鶴次郎さんに呼ばれてしかたなくケヌフチに来たんだと言っていた。興次郎は尺八が上手で虚無僧について回ったとも聞く。獅子舞では興次郎が笛



山城キミヨさん

を吹いて橋場さんという人が頭持ちをしていたと聞いている。一緒に渡道した母親はうちのジイちゃん(盛)が生まれた明治四十一年の五、六年前に亡くなった。五十三、四歳だった。それから一、二年して「自分の親は一人しかいないから呼ぶか」といって父親の与七をケヌフチに呼んだ。後妻さんとヨウ次郎さんと由太郎さんも一緒だ。お寺(極楽寺)のところは土地を持って大きな木を切っては燃やして土地を広げたそう。今考えるとほったいないことをしたものだ。極楽寺も鶴次郎さんと興次郎がやった仕事だ。ケヌフチはカシワの木が多いところで鉄道丸太がたくさん出荷されていたそう。その後、鶴次郎さんは大正二年に台湾へ行った。興次郎は長沼にいたが、あまりにも不作で友だちと四、五人で鶴川に行き、大正十三年に台湾へ渡った。森井さんも台湾へ行って森井さんとは親子のようにつき合っていたという。興次郎は昭和三十二、三年に死んだが、これは酒を飲んでよく話していたことだ。

永森 ヤスさんの話

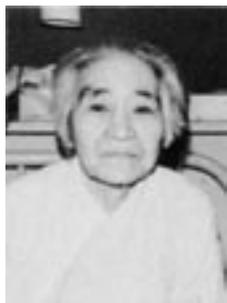
札幌市在住

明治二十三年生れ

私は越中富山から九歳の時に北海道に来た。最初は厚真に入ったが数え二十歳の時舞鶴に嫁に行った。嫁いだ所は島津農場といい、後から吉井農場、宮北農場と名前が変わった。

獅子舞は私が嫁に入った時(明治四十二年)よりも前からあった。連れ合いの政治郎は七つ年上だが、獅子舞はその父が富山県でやっていたのだそう。今泉というところの生まれといっていた。

獅子の中には八人か十人ぐらいが二列になって並んだ。子供らがタスキをかけ、弓のようなものを持って六、七人ついて歩いた。獅子討ちは二人か四人だったと思う。獅子の胴幕は青いような色で模様は何もなかった。獅子討ちは長い棒を持って、頭の上にはふさふさしたものをつけていた。着物は連れ合いの父親が内地から取り寄せたらしいんだ。獅子



永森ヤスさん

頭の色は黒かったと思う。舞は春と秋の二回宮北さんの前にあつた舞鶴の神社から出て、農場をひと回りした。

しかし、三、四年後にはどうしたのか獅子舞はなくなつてしまつた。獅子頭はケヌフチの小林温泉の前のところへ、売つたのかやつたのかは知らないが持つていった。着物はみんなにくれた。

舞鶴はぐるり中沼ばかりのところ、里の厚真には馬車で追分まで出るのだが、馬追橋のところは橋がなくて舟で渡らねばならないから六号の方を回つて行つたものだ。

角谷 従政さんの話

小樽市在住

明治三十四年生れ



角谷従政さん

私は明治三十六年に二歳ぐらいの時舞鶴に入つた。獅子舞は私の兄の時代にやつた。青年団の集会所が宮北さんの家の向かいの林の

中であつて、そこで練習していた。中心になつてやつていたのはその後ケヌフチに移つた福田長造さんや藤井さんだつた。

私は大正二年に舞鶴の学校を卒業しているから獅子舞を見に行つたのは明治四十三年頃のことと思うが、それは冬の日で、兄に連れられて集会所に見に行つた。

舞うのは六、七人で踊り子は花笠や刀を持つ。花笠をつけ、紅白を巻いた棒を二本持つて踊るのもあつた。胴の中は一列で竹の骨は入らない。花笠がほんとうにきれいだつた。

笛は「チーレロ レロレ チーチーチー」という尻上がりの曲だつた。今の泉郷の獅子舞を見たことがあるが、似ているところもあるが大分違つている。

獅子舞が踊られていたのは島津農場で、そこに鶴島神社という神社があつた。この農場は四十戸ぐらいで北陸の人が多かつたからその人たちが獅子舞をやつていたのであろう。踊つたのは明治四十年頃から四年かそこらのはずで、私が「青年」の時代にはもうなかつた。その後、私が軍隊から帰つた大正十一年に舞鶴神社の二階で獅子頭を見た。黒い漆塗りで立派なものだつた。漆を塗っていない頭は見ることがない。ケヌフチと舞鶴の間は沼地で、交流はあまりなかつた。



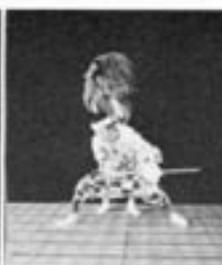
泉郷獅々舞入魂式 昭和53年8月13日

太鼓	笛	尾持ち	カヤ持ち	頭持ち	花持ち
					七五三の舞
					八五三の舞
					天狗の舞
遠藤 考 満	信田 三郎	開発 三郎	小栗 英治	登坂 力治	宮崎 邦彦
					堂高 政勝
					吉川 誠一
					岡本 慎一郎
					奥村 春進
					大笹 三守
					高山 薫
					鈴木 善一郎
					登坂 善一郎
					信田 広美
					富田 利則
					信田 貴温
					土居 利幸
					福田 清

七五三の舞



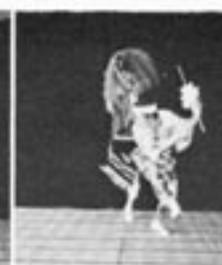
1



2



3



4



5.21



6.22



7.23



8.24



9.25



10.26



11.16.27



12.17.28



18



19



20



13



14



15



29



30



31



32

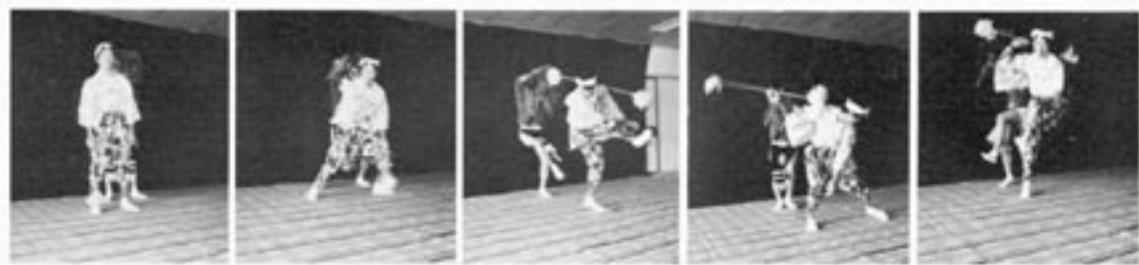


33

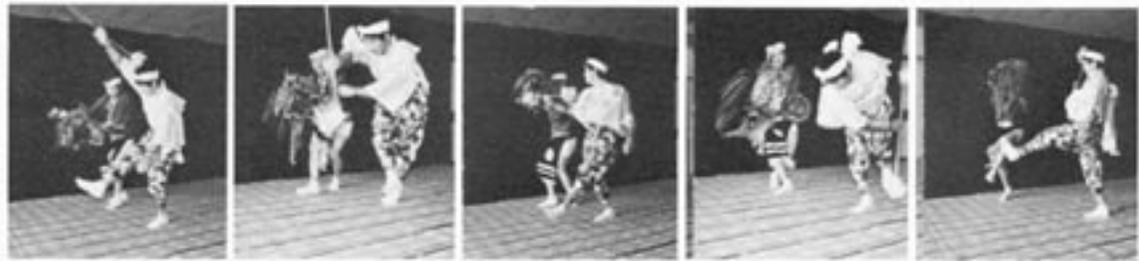
七五三の舞

The musical score is written for a piano in the key of B-flat major (two flats) and common time (C). It consists of seven systems, each with a treble and bass staff. The piece features a rhythmic pattern of eighth notes, often grouped in threes (trios) and sevens (septets). The bass line is primarily composed of eighth notes with accents, while the treble line features more complex melodic lines with slurs and triplets. The score concludes with a final flourish in the treble staff and a sustained chord in the bass staff.

八五三の舞



1 2 3 4 5.16



6.17 7.18 8.19 9.20 10.21



11.22 12.23 13.24 14.25 15.26



27 28 29 30 31



32 33 34 35 36

八五三の舞

The musical score is written for a piano in 3/4 time, featuring a key signature of two flats (B-flat and E-flat). It consists of seven systems of two staves each (treble and bass clef). The piece is characterized by intricate triplet patterns in the right hand and rhythmic accompaniment in the left hand. The notation includes various musical symbols such as slurs, accents, and dynamic markings like 'p' (piano) and 'f' (forte). The score concludes with a fermata over the final notes.

天狗の舞



1



2



3.37



4.14.27.38



5.15.28.39



6.16.29.40



7.17.30.41



8.18.31.42



9.19.32



10.20.33



11.21.34



12.22.35



13.23.36



24



25



26



43



44



45



46



47



48



49



50



51

天狗の舞

The musical score for "Tengu no Maï" is presented in six systems, each consisting of a treble and bass staff. The key signature is B-flat major (two flats) and the time signature is common time (C). The score features a variety of rhythmic patterns, including triplets and sixteenth-note runs. Asterisks (*) are placed in the bass staff of several measures, likely indicating specific performance techniques or accents. The piece concludes with a double bar line in the final system.

道中太鼓

参考文献

- 千歳市史
富山県の獅子舞
富山県教育委員会編集
とやまの民俗芸能
富山県郷土史会発行
祭りと神々の世界
伊藤曙覧 北日本新聞社刊
改記日本芸能史入門
三隅治雄 日本放送出版協会刊
後藤 淑 社会思想社刊

あとがき

富山県内の調査旅行の中で、どこへ行っても、次々と質問を繰り返す私たちに返って来たのは、「ご熱心ですネ」という、不思議そうな驚きの言葉だった。

県内には一千を越える獅子舞があり、八十年や百年近く続いているのはザラ。「県内の獅子舞を文化財に指定したら、数が多過ぎて收拾がつかなくなるでしょう」と県文化財保護審議委員の佐伯安一先生は話されていた。遠く北海道から、わずか八十年の歴史しか指たない獅子舞のためだけに調査に来たと言えば、驚かれるのは無理のないことなのかもしれない。私たちは気恥ずかしさを感じながら、しかたなく「北海道の歴史はまだ新しいですから。わずか一つの民俗芸能が大切なんです」と弁解したのだった。しかし、県庁でも土地の人々でも、関連者や知人を集めてはその土地に伝わる獅子舞の今昔を語ってくれた。お年寄りの一晩でも語り明かしそうな勢いに、私たちも舌を巻いた。そして、獅子舞を初めとする民俗芸能の多くが観光と商業ベースに乗せられながら、私たちの地域とは比べものにならないほど生活の中にとけ込み、地域の隅々で息づいているのを膚で感じとった。

四年前の夏、泉郷獅子舞の源流を訪ねる調査を始めた時、私たちの胸にあったのは「この勇壮な獅子舞がだれによってどこから伝えられたのか」という、単純な疑問でしかなかった。しかし、今してみれば、わずか百年ほどという新しい開拓地の人間の潜在的な郷愁が心の奥にあったのかもしれない。県立図書館で市史、町史、村史のたぐいを調べても、獅子舞に関する記述は一行も発見することができなかった。それに、数百年も、あるいは一千年前後もさかのぼって記されているのだから予想していたことながら驚かざるを得なかった。この調査を通じての最も大きな収穫は、得るべくして得た獅子舞のルーツ探しの答えではなく、獅子舞に込められた文字ならぬ歴史の重さと人々の生活の息吹を膚で感じとったことだったと言えよう。最後になったが、佐伯先生を初め県庁職員の方々、高橋佐一郎翁を初め県内、道内各地の方々にお世話になりながら、つたない報告書しかまとめられなかったことをおわびしたい。同時に、本報告書を読んだ方々に私たちの「最も大きな収穫」を少しでもお伝えできたなら幸いだと思う。



泉郷獅子舞調査報告

編 集 泉郷獅子舞保存会
 会長 登坂 英治
 千 歳 市 泉 郷
発 行 千歳市泉郷獅子舞保存会
 千歳市教育委員会
 千歳文化財保護協会
発行年度 昭和 56 年
印 刷 千歳印刷株式会社

(PDF 作成 平成 16 年)